68　心にも　あらでうき世に　長らへば　恋しかるべき　夜半の月かな

三条院



月

〈声に出してよんでみよう〉

ココロニモ　アラデウキヨニ　ナガラエバ

コイシカルベキ　ヨワノツキカナ

＊語頭以外のハ行の文字、つまり語中・語尾の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は、ワ行音「ワ・イ・ウ・エ・オ」でよみます。[1]　これを、「ハ行転呼音」と言います。

〈どんな意味だろう〉

本意でもなく、つらいことの多いこの世に生き長らえたならば、

恋しく思い出すに違いない、真夜中の月であることよ・・・！

＊「で」は、…ないで、の意。「心にもあらで」は、本意でもなく、自ら望んだわけでもなく、の意で。

＊「うき世」には、「憂き世」と「浮き世」の意味がこめられています。つらいことの多い、かりそめのこの世、という意味です。

＊「べき」は、きっと…に違いない、という、強い推量を表します。

＊文末の「かな」は、「･･･だなあ！」という詠嘆・感動を表します。現代語の「かな」と違って疑問の意味はありませんので、注意しましょう。

〈解説〉

もうこれ以上生きることは望まない、今よりさらにつらいことばかりだろうから。しかし、意に反して生き長らえてしまった場合、つらい思いで見ているこの月を、恋しく思い出す時がきっと来るのだろう、その時はきっと今よりさらにつらい思いをしているだろう

から、という歌です。どうしようもない絶望感と虚無感に彩られた歌です。作者は、帝王という位に就きながら、そんなにも悲哀に満ちた人生を送っていたのでしょうか。せめて、この夜の月の光が、作者の心を幾分かでも慰めたであろうことを、期待せずにはいられません。

〈作者と出典〉

三条院（976－1017）は、平安時代中期の、第 67 代天皇（在位 1011－1016）。時の政治権力は、藤原道長を長とする摂関家に、全面的に掌握されていました。先代の一条天皇の譲位により、三十六歳でようやく即位した三条天皇でしたが、道長は自分の娘の彰子が一条天皇との間に生んだ皇子（第 68 代後一条天皇）を早く即位させたいため、陰に陽に、三条天皇に退位を迫り続けていました。三条天皇は、病弱で、眼も悪く、失明寸前の状態だったと言います。内裏も、たびたび火災に見舞われました。追い詰められ、気も弱くなり、とうとう譲位を決意した三条天皇が詠んだ歌が、この「心にも」の歌であったと言います。かすかに残された視力を精一杯振り絞って仰いだ空の月、この月の光を恋しく思い出す時が将来やって来るのだろう、という、やるせなさ、絶望感が、ひしひしと伝わって来ます。

一方、その数年後の寛仁 2（1018）年、三条天皇を失意のうちに退位・崩御に追い詰めた当の本人の道長は、彰子・妍子・威子の３人の娘が后として並び立った日、次のような歌を詠んでいます。

この世をば　わが世とぞ思ふ　望月の　欠けたることの　無しと思へば[2]

（この世を、自分の世であると思うよ。満月が、欠けたことも無いと思うと。）

得意の絶頂にある道長の表情が彷彿としてくるような自信満々の歌です。同じく月を仰ぎ見ながら、人の思いは、こんなにも隔絶するものなのでしょうか。道長自身も、さすがにこの歌は気恥ずかしく思ったらしく、自分の日記（**『御堂関白記』**と呼ばれます）

には書き留めていません。道長の言動を冷ややかに、批判的に観察していた小野宮実資の日記『小右記』が、「この世をば」の歌を後世に伝えているのでした。

なお、三条院の「心にも」の歌の出典は、4番目の勅撰和歌集（天皇の命令で編集された和歌集）である『後拾遺和歌集』（1086頃成立）です。

---

1 ハ行の子音は、8世紀頃 [p] から [ɸ]（現代語の「フ」の子音）に変化し、やがて11世紀頃、前後を母音にはさまれた語中・語尾の [ɸ] が [w] と発音されるようになりました。なお、[ɸ] が [h]（現代語の「ハ・ヘ・ホ」の子音）に変化したのは、17世紀頃と推定されています。

2 永井路子氏による歴史小説『この世をば』の書名は、この歌に由来しています。